

研究ノート

小学校教員養成における社会科授業構成能力の育成
—教師のゲートキーピング論を手がかりに—

角田 将士*

これからの教員養成教育はどうあるべきか。2012年8月に示された中教審答申においては、教員に求められる資質能力が明示され、大学と教員委員会との連携・協働によって、教職生活全体を通じて「学び続ける教員」を継続的に支援するための一貫した体制づくりが課題であることが指摘された。このような指摘を受けて、全国の大学や教育委員会では様々な改革が行われており、教員になる前の教育は大学で、なった後の研修は教育委員会で、という役割分担は脱却されつつある。そのような動向の中で、教職課程の一科目としての社会科教育関連科目はどうあるべきなのか。学習指導要領に定められた内容を忠実に伝達するだけの授業しか構想し得ない力量しか育てることができなければ、よりよい社会科授業を求めて「学び続ける教員」は育たないであろう。ではどうすればよいのか。本稿では、近年アメリカで提唱されている教師のゲートキーピング論に着目し、質の高い社会科授業を創造することができる力量をいかにして育成していくのか、小学校教員養成課程における筆者自らの実践を事例にしながら、その方略について考察した。

キーワード：教員養成，小学校，社会科，教師のゲートキーピング

はじめに—近年の教員養成をめぐる課題—

今日における社会の激しい変動や学校教育の抱える課題の複雑化、多様化の中で、教員の質をいかに保持していくのかが、社会的な課題となっている。そのような中で、今、わが国における教員養成教育のあり方は大きく問い直されてきているといえる。

2006年7月11日付で発表された中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」と題された答申においては、①教職課程

の質的向上、②「教職大学院」制度の創設、③教員免許更新性の導入、という三つの柱が掲げられ、教員養成機関として位置付けられる全国の教員養成系大学・学部（課程認定を受けた私立大学なども含まれる）に対して、送り出す教員の品質保証とそのため体制づくりが求められた。この答申と前後して各大学でも様々な改革的な取り組みがなされてきた¹⁾。

そして、2012年8月28日付で発表された同審議会の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」と題された答申においては、2006年の答申の内容がさらに深められ、教員養成教育に関わる指摘が多岐にわたってなされている。例えば「これからの教員

*立命館大学産業社会学部准教授

に求められる資質能力」として、育成がめざされる教員の力量が下記の3点に整理されて示されている。

- i 教職に対する責任感, 探究力, 教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力 (使命感や責任感, 教育的愛情)
- ii 専門職としての高度な知識・技能
 - ・教科や教職に関する高度な専門的知識 (グローバル化, 情報化, 特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む)
 - ・新たな学びを展開できる実践的指導力 (基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため, 知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習, 協動的学びなどをデザインできる指導力)
 - ・教科指導, 生徒指導, 学級経営等を的確に実践できる力
- iii 総合的な人間力 (豊かな人間性や社会性, コミュニケーション力, 同僚とチームで対応する力, 地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力)

上記のように, これまであいまいだった「教師力」の内実がより具体的に示されてきたことに, この答申や近年の教員養成をめぐる動きの大きな特徴の一つがある。

2012年の答申では, これらの資質能力を育成するための教員養成教育改革の方向性として, 「教員になる前の教育は大学, 教員になった後の研修は教育委員会という, 断絶した役割分担から脱却し, 教育委員会と大学との連携・協働により教職生活全体を通じた一体的な改革, 学び続ける教員を支援する仕組みを構築する必要

がある」として, 大学と教育委員会が様々にコラボして, 教員養成の課題にあたっていく体制づくりを求めている。また, 大学での教員養成課程科目の内容もそれにふさわしいものであることが求められており, 「教職実践演習」といった新しい科目も答申に先行して導入された²⁾。

また, 教員の質保証という観点からは, 「教員養成を修士レベル化し, 教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」として, 教員免許制度も改革し, 修士課程修了レベルを「一般免許状 (仮称)」, 学士課程修了レベルを「基礎免許状 (仮称)」とするなどの, 具体的な制度改革に関する提言もなされている。

これらの答申が示している内容は, 教員免許のあり様という制度的なレベルから, 日々行われている教職科目の授業のあり様という実践的なレベルにまで関わるものであり, 指摘された課題にどう対処するのか, 各大学では様々な議論が交わされてきている³⁾。これらの課題への対処の方向性は様々に考えられるが, 少なくとも今後の教員養成教育においては, これまでのように, 法令上必要な最低限度の科目数と担当教員がいて, 学生が定められた必要数の科目を履修していけば, 教員としての力量をやがて身に付けていってくれるはずだ, という予定調和的な考え方⁴⁾ はもはや通用せず, 課程認定の厳格化はもちろんのこと, 認定を受けた学部や大学全体で取り組むべき課題となってきた。各大学や学部の実力が試されているといっても過言ではないだろう。

翻って, 教職課程科目の一担当者のレベルではこれらの課題にどう取り組んでいけばよいのだろうか。立命館大学産業社会学部では, 2007年4月より小学校教員養成課程の課程認定を受け, 「子ども社会専攻」を開設したが, 例えば

「初等社会科教育法」や「初等社会」といった具体的な科目の中では、先の課題にどう取り組んでいけばよいのだろうか。

本稿では、上記のような問題意識を背景に、筆者が担当している「初等社会」の科目を事例にして、小学校教員に求められる力量をどのように育成していくのか、とりわけ若手の教員が苦手としている社会科の授業を創造していく力量をいかに育てていくのか、そのあり方について考えてみたい。その際、近年注目されてきている「教師のゲートキーピング」という考え方を参考に、筆者の取り組みや教育実習などの小学校教員養成課程全体での取り組みなども振り返りながら、質の高い教員養成教育を実現していくための課題や今後の展望についても述べていきたい。

I 教師のゲートキーピングと社会科

2012年の答申では教員養成における「役割分担」は脱却すべき状態だとされている。しかし、一科目の担当者のレベルにおいては、答申で示されたような資質能力のすべてをトータルに鍛えていくことは困難であるように思えるし⁵⁾、自らの担当科目の中で実現可能な具体的な手立てをとと言われても、すぐには思い当たらないのが実情だ。ではどうすればよいのか。やはりそれぞれの科目に課せられた固有の教育的役割を意識し、そこで鍛えていくことが求められる資質能力とは何かをじっくりと問い、答申の趣旨と照らし合わせながら、自らの実践を省察していくことではないだろうか。

以上のように考えてくれば、筆者が担当している「初等社会」という科目においては、小学校の社会科で子ども達に形成することが求めら

れる社会認識の内実と、その形成を保証する授業を構成していくために必要な教材研究の視点を受講生たちに身に付けさせることが主眼となろう。そのことがこの科目に課せられた固有の教育的役割であると考えられる。しかし、「社会科とは、社会科の教材研究とは、かくあるべし」という望ましい社会科像を単に受講生に「教授」しただけでは、答申に示されたような「学び続ける教員」は育たないであろう。大切なことは、15回の講義を通じて、教職生活全体にわたって、彼らが社会科の教材研究を行う際に振り所となる視点を育てることだと思われる。

では、小学校社会科の授業づくりを行っていく際に、振り所になる視点とはどのようなものなのだろうか。この点について大きな示唆を与えてくれるのが、アメリカ合衆国の社会科教育学者であるスティーブン・J・ソーントン氏が提唱し、近年になって我が国においても紹介された「教師のゲートキーピング」という考え方である⁶⁾。

ソーントン氏の主張は多岐にわたるが、その要点は訳者の一人である渡部竜也氏によって、下記の四点にまとめられている⁷⁾。

- ①社会科の教育改革は、常に公的カリキュラム（学習指導要領のようなもの）の変革によって行われると考えられてきたが、人々が考えているほどには、公的カリキュラムは学校現場の変革を引き起こすことはあり得ないし、これまでも引き起こしてこなかった。
- ②なぜなら、カリキュラムを実行する教師が、意図的にせよ無意識にせよ、自らの問題関心や教育観、価値観などから時として公的カリキュラムの設計者の意図とは反する調整を行うからである。こうした教師の行為を「ゲートキーピン

グ」と言う。この教師のゲートキーピングの質が、社会科授業の良し悪しに影響した。教師は質の悪い公的カリキュラムの改善者になることもあれば、質の良いカリキュラムの妨害者になることもあった。注目しなくてはならないことは、こうした一人ひとりの教師によって「実際に行われているカリキュラム」である。

- ③社会科教育の改革は、一人ひとりの教師によって「実際に行われているカリキュラム」を改善していくしかない。そのためには、社会科教師個々のゲートキーピング能力を改善していく他にない。それに当たって、公的カリキュラムを無批判にただ実行していく下請けとしての教師ではなく、教師自らが、社会科のねらいを考え、そしてそれを意識して、目標・教科内容・教育方法を連続的に考察・判断していける「主体的なカリキュラムと授業の調節者としての教師」を育てていく必要がある。なぜなら、そうしたことができる教師がこれまでも質の高い社会科授業を実行できたからである。
- ④教員養成も、教師はただ公的カリキュラムを忠実に「伝達する」存在とせず、また社会諸科学の最新の学問的成果を子どもに噛み砕いて解説する存在とせず、カリキュラムをデザインする存在（社会科のねらいを達成するために、大まかなながらも中長期計画をデザインし、これを意識して単元・授業を連続的にデザインし実行していける存在）に育てていく必要がある。

つまり、「カリキュラム・ユーザーとしての教師」から「カリキュラム・メーカーとしての教師」への転換ということである⁸⁾。このような主張を踏まえれば、教職課程科目の中で受講生たちには、より望ましいゲートキーピングの方向性について示唆していくことが求められる

ことがわかる。

なぜ「教授」ではなく、「示唆」なのかと言えば、現実に公的カリキュラム（学習指導要領）が法的拘束力を持つものとしてある以上、それを無視した授業はあり得ないし、教職課程科目の中でもそのことを踏まえる必要があるが、その一方で受講生たちが、与えられた公的カリキュラムを単に伝達するだけでは社会科の授業としての深まりに欠けてしまうし、何より教える側にとっても社会科を教える楽しみを感じることができない、ということに自ら気付いていくことが大切だからである。そのことが、彼らが教職に就いた後も生きて働く社会科授業づくりの視点となり、彼らのゲートキーピングの質を高めていくことになるはずだからである。逆に言えば、15回という限られた講義の中ではそのことに気付かせる効果的な手立てが必要になってくる。

では、小学校社会科の授業づくりのために求められるゲートキーピングとはどのようなものなのだろうか。次に、実際の小学校教員たちがどのようなゲートキーピングを行っているのか、とりわけ質の高い社会科授業を実践している小学校教師たちが行っているゲートキーピングとはいかなるものかについて見ておきたい。

II 教師が行うゲートキーピングの実際

優れた小学校社会科の授業はたくさんあるが、ここでは、2011年度に全国社会科教育学会の学会奨励賞を受賞し、その実践が研究的にも高く評価されている、佐藤章浩氏（現・鳴門教育大学附属小学校教諭）の実践を取り上げて、氏がどのような方向性でゲートキーピングを行っているのかについて見てみよう。表1は、佐

表 1：佐藤氏による単元「警察の仕事」

<p>1 交通事故にあいそうになった経験を出し合ったり、交通事故寸前の動画を見たりして学習問題をつくる。 『地域の危険な場所や事故・事件からくらしを守る仕組みを調べて、低学年の子の安全を守るマップをつくろう』</p> <p>2 学習問題に対する予想をたて調べ方を決める。</p> <p>3 地域の危険な場所や安全のための設備、交番や警察署を中心とした関係機関の連携の様子について調べる。</p> <p>4 地域の安全を守る仕組みについて話し合い、みんなで確かめる。</p> <p>5 学んだことを安全マップに表し、低学年の友達に伝える。</p> <p>6 <u>スピード違反の車を見かけたら交番のお巡りさんはどうするのかについて考える。</u></p>
--

草原和博, 山田秀和, 佐藤章浩「社会科学教育の再構築—不確実な時代の主権者育成—」全国社会科教育学会第61回全国研究大会シンポジウム発表資料, 2012年10月, より筆者作成。

藤氏が実践した小学校第3学年の単元「警察の仕事」の概要を示したものである。佐藤氏の実践の真骨頂は、下線を付した第6時の「スピード違反の車を見かけたら交番のお巡りさんはどうするのかについて考える」という時間に集約されている。この学習の意義を明確にするために、学習指導要領に忠実な授業（公的カリキュラムを伝達する授業）の場合はどのような展開になるのかを表2に示した。

学習指導要領における小学校社会科の大きな特質は、地域で活躍する人たちの「努力」や「工夫」、「想い」や「願い」に焦点化させた社会（地域）研究を行わせる点にある⁹⁾。このような授業構成は、社会に生きる「個人の側の視点」に寄り添い、そこから社会について認識させようとする、いわば「個人の側からのわかり方」に基づくものになっているといえる。小学校社会科授業（とりわけ第3-4学年におけるそれ）

表 2：一般的な「警察の仕事」についての単元展開

	主な学習活動	留意点
交通事故を防ぐ	<ul style="list-style-type: none"> ○交通事故が起きたときの経験を話し合い、事故を防ぐための努力に関心を抱く。 ○地域の交通施設マップづくり <ul style="list-style-type: none"> ・交通施設調べと施設マップ ・信号機のきまりや道路標識・道路標示のきまりの意味 ○交通事故の発生場所とその理由 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の交通事故発生地図やひやり体験マップづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近に起きた交通事故の目撃談や経験談から導入し、交通事故への関心を高める。 ・法やきまりの視点を織り込む。
犯罪から人々を守る	<ul style="list-style-type: none"> ○交通事故以外の警察の働きについて調べる。 ・さまざまな犯罪から人々を守る。 ○事件や犯罪を目撃したら？ <ul style="list-style-type: none"> ・110番通報の仕方と通報から手配までの関係諸機関の組織的な働き 	<ul style="list-style-type: none"> ・警察署への通報の仕方から、警察署の組織的な仕組みや働きに目を向ける。
事故や犯罪のないまちづくり	<ul style="list-style-type: none"> ○事故や犯罪を防ぐための地域の人々の協力 <ul style="list-style-type: none"> ・PTAによる地域巡回 ・子ども110番の家 ・交通安全・防犯新聞づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・事故防止や防犯への呼びかけ。

北俊夫・片上宗二編著「小学校 新学習指導要領の展開」明治図書, 2008年, p.77, より筆者作成。

は、地域で活躍する人たちの行為やその背後にある願いを共感的に理解させることを通して、子どもに「自分たちもそうありたい」と思わせ、「地域社会に対する誇りと愛情」を持ち、地域の発展に尽くす人材へと成長するように促すことが指導の主眼となる。これを「警察の仕事」に即して考えれば、警察署や交番で働く警察官や地域で事故防止や防犯のための活動を行っている人々の努力や想い、110番通報の仕組みに隠された工夫などに触れることで、自分たちの生活を守るための仕組みを知り、それらに対する感謝の想いを醸成することが指導の主眼となる。そのため、一般的な単元展開は表2の

ようになっていく。

しかし、上記のような「個人の側からのわかり方」に基づいた授業には、社会科授業として大きな課題があるといえる。それは、人々の「想い」や「願い」に焦点化するあまり、学習の結果として、子どもが社会の現実を認識できにくくなってしまふ点である。警察の仕事で言えば、それが「国家権力の行使」であるという側面が表2のような展開からは欠落してしまっている点である。「逮捕」という形で、人々の身柄を拘束したり、時には拳銃の使用も許可されるといった大きな力を保持している警察の仕事は、厳格なルールのもとで遂行されている。平成20年に改訂された学習指導要領では、小・中・高ともに「法やきまり」の学習の充実が求められているため、表2にも「法やきまり」という視点が盛り込まれてはいるが、具体的には交通ルールなどであり、それらは「(私たちが)遵守すべき存在」として子ども達の前に提示されていよう。しかし、警察のような国家権力と法の関係に基づけば、法は「権力を縛る」ものでもある。警察の仕事を扱う際にはこの視点は欠かすことはできないが、表2のような展開では、そのような学習への発展は期待できない。佐藤氏はその点を見事にゲートキーピングしている。表1と表2を比較すると佐藤氏の実践においても第1時から第5時は学習指導要領に忠実な学習が展開されていることがわかる。佐藤氏がそれにアレンジを加え、先述したような法概念を子ども達に理解させようとしたのが第6時である。

第6時においては、交番のお巡りさんが安全を守るために仕事をしていることを知った子ども達に、「交番のお巡りさんはスピード違反の車を発見してもすぐに追いかけない」という事

実をぶつけ、安全を守るためには、スピード違反をした車を発見したらすぐに取り締まった方が良い、という彼らの予測を覆すところから学習はスタートする。そして「なぜ交番のお巡りさんはスピード違反の車をすぐに追いかけないのか？」という問いを軸に学習が展開していく中で、交番のお巡りさんは違反の車を見つけても交番のバイクで自らは追いかけずに、白バイやパトカーと連携し、赤色灯とサイレンで周囲の安全を確保しながら取り締まりを行う、という「ルール」に従って仕事を行っていることに気付かせていっている。安全を守るために人々にきまりを守らせるとともに自らもきまりを守る存在である、という警察像を形成させているわけである。佐藤氏の実践の中では「公務員」という言葉によって説明もなされており、子ども達が警察官に代表される公的サービス（公務員）のあり方について、より科学的に理解することができる優れた実践となっている¹⁰⁾。

上記のような佐藤氏のゲートキーピングのあり様に鑑みれば、質の高い小学校社会科の授業づくり求められるゲートキーピングの方向性が見えてくる。公的カリキュラムとしての学習指導要領が求めるように、人々の行為や願いを学習対象としつつも、その背後にある社会のシステムや構造に対していかに子どもたちの目を向けさせることができるか、そのようなアレンジを行うことができるかということによって、提供される社会科授業の質が左右されてくるといえるだろう。

Ⅲ 小学校教員養成課程科目「初等社会」での 取り組み

では、Ⅱで見えてきたようなゲートキーピング

を可能にする社会科授業構成能力を育成するためにはどうしたらよいのだろうか。その具体的な手立てとして、筆者自らの取り組みを一試案として提示してみたい。

筆者が小学校教員養成課程科目として担当している「初等社会」について、2012年度のシラバスは表3の通りである。2012年度のシラバスはそれ以前のものよりも、先のゲートキーピングの概念を生かした改善を加えたものである。

この15回の中で、先述してきたゲートキーピングの方向性を受講生たちに感得させていく必

要がある。この科目は「社会科」で扱う教科の内容に関わる授業であるため、「初等社会科教育法」のように純粋に社会科授業構成の理論だけを取り出して教えることは求められていない。そのため、第4講以降は学習指導要領で定められた小学校社会科の学習領域についてそれぞれどのような授業を行っていくのかを検討していくケーススタディ的な展開となっている。このケーススタディを効果的に行うためには、第1-3講でゲートキーピングの必要性を意識させ、望ましいゲートキーピングの方向性を示唆する必要があるが、そのためのキーとなるのが第3講である。第3講は「小学校社会科授業における教材研究の視点—個人／社会からのわかり方—」というテーマの下、先に示したような学習指導要領が求めている授業のあり方と、そこにどのようなアレンジを加えていけば社会科の授業としての質を高めていくことができるのかを扱う回である。

15回のシラバス上、極めて重要な役割が課せられている第3講ではあるが、その展開は極めてシンプルである。授業で使用する教材は2つ。一つは2000-2005年に放送されたNHK総合テレビのドキュメント番組である「プロジェクトX～挑戦者たち～」である。数多くのエピソードの中で受講生たちに視聴させるのは、2001年に放送された「男たち不屈のドラマ 瀬戸大橋—世紀の難工事に挑む—」というエピソードである。もう一つは、同じく瀬戸大橋について報じた二つの新聞記事である。いずれも朝日新聞の日刊に掲載されたものであるが、一つは2012年3月3日掲載の社説「本四架橋 この失敗を繰り返すな」と、もう一つは2011年11月9日掲載の「架橋時の夢 消える 瀬戸大橋 レジャー施設閉館」という記事である。

表3 筆者が担当する小学校教員養成科目「初等社会」の2012年度のシラバス

1	小学校小学校における社会科教育とは何か—社会科の歩みから考える—
2	小学校社会科授業構成の理論と方法—社会科授業を生み出す様々な考え方—
3	小学校社会科授業における教材研究の視点—個人／社会からのわかり方—
4	小学校社会科地域学習における学習内容①—「地域調査活動」をどう授業化するか—
5	小学校社会科地域学習における学習内容②—「地域の商店」をどう授業化するか—
6	小学校社会科地域学習における学習内容③—「地域の工場・農家」をどう授業化するか—
7	小学校社会科地域学習における学習内容④—「地域の公共サービス」をどう授業化するか—
8	小学校社会科地域学習における学習内容⑤—「地域の過去と現在」をどう授業化するか—
9	小学校社会科地域学習における学習内容⑥—「特色ある地域」をどう授業化するか—
10	小学校社会科国土・産業学習における学習内容①—「我が国の産業」をどう授業化するか—
11	小学校社会科国土・産業学習における学習内容②—「我が国の国土」と「環境保全」をどう授業化するか—
12	小学校社会科歴史学習における学習内容—「我が国の歴史における人物と文化遺産」をどう授業化するか—
13	小学校社会科政治学習における学習内容—「政治のしくみ」と「日本国憲法」をどう授業化するか—
14	小学校社会科国際理解学習における学習内容—「身近な国」と「国際貢献活動」をどう授業化するか—
15	小学校社会科授業開発演習

（筆者作成。）

まず「プロジェクト X」について見ておきたい。視聴させる回の番組展開は、おおよそ表4のように整理できる。「プロジェクト X」は様々な巨大プロジェクトの影でその成功を支えた人たちに焦点をあてた番組として大きな反響を呼んだ番組である。2001年2月6日に放送された「不屈のドラマ 瀬戸大橋」は、世紀の難工事と言われた瀬戸大橋建設に挑んだ本州四国連絡橋公団の関係者、とりわけ工事責任者だった杉田秀夫氏を取り上げたエピソードである。

表4を通覧するとわかるが、番組は杉田氏をはじめとする工事関係者の想いや願い、努力と工夫に焦点をあてて、瀬戸大橋建設の経過が理解できるように構成されている。実際に視聴した受講生たちに感想を問うと、「杉田さんカッコいいです」「瀬戸大橋ってすごいですね」といった感想がほとんど占めることからわかるように、この番組は、杉田氏らの行為を視点に瀬戸大橋という事象を認識させ、結果としてその「素晴らしさ」に思い至るように構成されている。そしてこのような社会認識のあり方は、先にも述べてきたように、人々の工夫や努力、想いや願いに焦点化した社会認識の形成を求めている学習指導要領がめざす方向性と一致していることがわかる。

この番組を教材として取り上げるのは、まずは学習指導要領が求めている社会認識形成の論理を受講生たちに確認させ、結果としてどのような社会認識が形成されるのかを彼らに実際に体感させるためである。それならばなぜ実際の現場でなされている授業を取り上げないのかというと、実際になされている授業を視聴した受講生たちの多くは、一目見て判別が可能で、その教師の子ども達との対応の仕方や黒板の使い方、机間指導のやり方などの授業の技術的な側

表4：「不屈のドラマ 瀬戸大橋」の番組展開

導入	○瀬戸大橋建設のきっかけとしての連絡船事故とはどのようなものだったか。 【四国の人々の願い】
展開Ⅰ	○潮流が速い瀬戸内海で、ケーソンと呼ばれる土台を設置するために、海底の厚い堆積層をどのようにして取り除いたのか。 【工事関係者の工夫と努力】
展開Ⅱ	○奥さんを病気で失った杉田さんはどんな想いで工事に向き合ったのか。 【工事リーダー杉田さんの想いや願い】
展開Ⅲ	○海底で傾いたケーソンをどのようにして正しい位置に戻したのか。 【工事関係者の工夫と努力】
終結	○工事に携わった人たちは今どんな想いで瀬戸大橋を見つめているのか。 【工事関係者の想いや願い】

(筆者作成。)

面に着目しがちであるため、もちろんそのようなテクニカルな力量を高めていく必要もあるが、ここでは、学習指導要領に内在する、人々の行為に焦点化した社会認識形成の論理とその帰結に着目させたいために、論理が明快なこの番組を教材として用いている。とりわけ瀬戸大橋建設という特定地域の公共事業を取り上げたこのエピソードは、開発を行う側からの視点で明確であり、学習指導要領が小学校社会科で取り上げることを求めている「開発」や「地域」といった要素を含み込むものであり、そういった観点からもこのエピソードは教材として最適であると考えている。

「プロジェクト X」を視聴し、上記のような内容を確認した後、受講生たちの反応を見ながら、もう一つの教材である新聞記事を配布することになっている。配布する新聞記事は、瀬戸大橋建設には莫大な費用が費やされており、その回収が困難になっていることや、割高に設定さ

れた通行料金のために客数が減少していき、採算が取れなくなったレジャー施設が休業に追い込まれたことなどを報じたものであり、感動的なエピソードに触れた受講生たちの表情が一気に曇っていくことになる。そして、これらの新聞記事をもとに、ここで提示されている瀬戸大橋像を確認していく。その上で、二つの教材を基にして、瀬戸大橋についてどう考えるかについて受講生たちに問うていくようにしている。

「プロジェクトX」が提示する瀬戸大橋像がプラスの像だとすれば、二つの新聞記事が提示するのは、マイナスの像である。特に後者の方は現在の瀬戸大橋を取り巻く、眼を背けたくなるような厳しい実情を表したものである。しかし、瀬戸大橋という社会事象を間違い少なく認識していくためには、どちらか一方の認識だけでは不十分であろう。今日のように複雑化した社会においては、一つの社会事象であっても、見方によっては全く異なった姿を見せることがある。「プロジェクトX」の場合は、テレビ番組であるため、娯楽性という観点から、前者に寄り添った展開で良いのかもしれないが、学校教育における社会科授業となると、話は別であろう。学習指導要領が期待している社会像は一面的であり、社会の科学的認識を旨とする社会科教育においては、そこに留まらず、様々な角度から社会事象について分析していくことのできる力を子どもたちに育成することが求められる。そのため各教師が適切にゲートキーピングをしていくことが極めて重要であるが、これらの二つの教材を通して受講生たちが、無理なくそのことに気付いていけるように第3講は組織されている。

以上のように、社会科授業を構想していく際には特にゲートキーピングを意識する必要があ

ること、またその望ましい方向性について、単に教授するのではなく、受講生自身が発見できるように、との考えの下で、「初等社会」の授業を組織している。もちろん、教育論を直接的に扱った「初等社会科教育法」の方が授業構成能力の育成という点では効果的であるかもしれないし、この他にも効果的な指導方法があるかもしれない。今後も検討を続けていきたい。

おわりに—課題と展望—

本稿においては、近年の教員養成改革の議論を踏まえながら、「学び続ける教員」を育成するためにはどうしたらよいか、という問題意識の下で、質の高い社会科授業を創造できる力量を形成するための手立てについて、自らの実践をその一試案として提示した。

社会科の場合、教科の本質をめぐる議論が絶えないために、ゲートキーピングを意識することが特に大切になってくる。例えば数学教育や外国語教育などは、教育のねらいや目標、教授すべき内容がある程度固定されており、組織化されている。そのためこれらの教科では教師は教育のねらいから議論する必要はあまりないかもしれないし、そこから教育内容や教育方法のあり方を議論する必要性も生じないかもしれない¹¹⁾。しかし社会科の場合は、子ども達に市民性を育成することが教科の究極的な目標とされてはいるものの、そのために、何をどのように、いつ教えればよいか、子ども達の実態や地域の特性に鑑み、カリキュラムや授業を構築していく必要があるという教科的特性を持っている。教員養成科目における社会科関連科目でもこのことを意識した授業づくりが必要であろう。

以上のように、教科による特性はあるが、「学び続ける教員」の養成という理念の下では、各教科で自律的な授業づくりを行っていく力を育むことが、今まで以上に重要になってこよう。そのためには本稿で検討したような座学的な科目の充実ももちろんのことではあるが、実際に学ぶことができる教育実習の充実も欠かすことはできない。そのため、大学と実習校との連携も今まで以上に重要になってこよう。

立命館大学産業社会学部の小学校教員養成課程では、3年次に立命館小学校での実習（2週間）を、4年次には出身小学校での実習（2週間）を配置している。全国各地からの進学者を抱える立命館大学の場合、それぞれの母校と連携していくのは至難の業であるが、立命館小学校の場合は物理的にも、また同じ学校法人ということもあって組織的にも、より現実的な連携が可能になっている。

それぞれの教科レベルでの連携はすでにはじまっているが、例えば社会科では、年に一度、立命館社会科研究会を開催し、小学校のみならず、立命館学園内の社会科教育関係者が一堂に会した研究発表会・実践報告会を開催している（例年3月に開催、2012年度で第3回となる）。2011年度に開催した会では、小学校教員養成課程を履修した学生が「小学校社会科における地域学習の改善—「地域」から「社会」が見える授業をめざして—」と題して、卒業研究の内容を報告している。報告されたのは、農家の人たちの「努力」と「工夫」の学習に留まりがちな小学校第3-4学年の「農家の仕事」についての学習を、京野菜を事例にしなが、ブランド化などの「販売戦略」という視点を盛り込むことで改革した授業モデルであり、本稿でも検討した佐藤氏のゲートキーピングの方向性と

重なるものであった¹²⁾。このゲートキーピングの方向性について研究会では議論が交わされ、それぞれに認識を深めることができた。

以上のような方向性は今後も堅持していきたいが、まだまだ教科レベルでの単発的な連携に留まっている。可能であれば、小学校教育養成課程全体での研究会や共同研究をさらに進めていく中で、立命館小学校をはじめとする近隣の小学校などとの連携体制を強化し、さらに質の高い教員養成教育を実現していきたいと考える。

【註】

- 1) 国立の教員養成系大学、学部の取組については、日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト『教員養成カリキュラムの豊かな発展のために—〈体験〉—〈省察〉を基軸にした「モデル・コア・カリキュラム」の展開—』2006年3月などを参照。
- 2) 「教職実践演習」は2010年度入学生から適応されたカリキュラムにおいて新設された科目であり、4年間の教職課程での学びの総決算とも言えるべきもので、4年次の後期に履修することが定められている免許法上の必修科目である。送り出す教員の質保証を行うために、受講生に教職初年度の職務遂行能力の有無を確かめることが目的とされている科目であり、2013年度が開講初年度ということになる。
- 3) ジアース教育新社編『SYNAPSE』2012年9月号、などに詳しい。
- 4) このことについては、横須賀薫『教師養成教育の探究』評論社、1976年、pp.46-47、を参照されたい。
- 5) このことについては、下記を参照されたい。
 - ・拙稿「体験と省察を基軸にした教員養成カリキュラムの充実のために（1）—授業構成能力の育成による『大学』性の確立—」広島大学大学院教育学研究科編『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第55号、2007年3

月。

- 拙稿「授業構成能力の育成を中核にした教員養成教育—社会科を事例として—」京都地区私立大学教職課程研究連絡協議会『ニューズ・レター』27号, 2008年3月。
 - 拙稿「教員養成における大学の役割について考える」『立命館学校教育研究会会員メッセージ』2012年5月。
- 6) スティーブン・J・ソーントン（渡部竜也・山田秀和・田中伸・堀田論訳）『教師のゲートキーピング—主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて』春風社, 2012年。原題は, Stephen J.Thornton, *TEACHING SOCIAL STUDIES THAT MATTERS*, Teachers College, Columbia University, 2005.
 - 7) 上掲書, pp.240-241, より引用。
 - 8) 同上書, p.241.
 - 9) このことについては, 下記を参照されたい。
 - 拙稿「小学校社会科学習の改善（1）—『社会からのわかり方』に基づいた5年単元『日本の酪農』の開発—」広島大学大学院教育学研究科編『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）第53号, 2005年, pp.109-116.
 - 拙稿「小学校社会科授業の改善（2）—4年単元『美山町を通して過疎化を考える』の開発—」立命館産業社会学会編『立命館産業社会論集』第44巻, 第4号, 2009年3月, pp.149-158.
 - 10) 佐藤実践の詳細については, 草原和博, 山田秀和, 佐藤章浩「社会科学教育の再構築—不確実な時代の主権者育成—」全国社会科教育学会第61回全国研究大会シンポジウム発表資料, 2012年10月, を参照されたい。
 - 11) 前掲書6), p.242.
 - 12) 寺田晴香「小学校社会科における地域学習の改善—「地域」から「社会」が見える授業をめざして—」立命館産業社会学会編『for/est 卒業論文選集2012』2012年6月, pp.233-251, としてまとめられている。

【主要参考文献】

- スティーブン・J・ソーントン（渡部竜也・山田秀和・田中伸・堀田論訳）『教師のゲートキーピング—主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて』春風社, 2012年。
- 横須賀薫『教師養成教育の探究』評論社, 1976年。
- 森分孝治「授業研究の目的—社会科教育学の立場から—」日本教育方法学会編『教育方法14 子どもの人間的自立と授業実践』明治図書, 1985年。
- 森分孝治「社会科教師の資質と専門性」教員養成大学・学部教官研究集会社会科教育部会編『社会科教育の理論と実践』東洋出版社, 1988年。

Research Note

The Social Studies Capability Needed by Primary School Teachers and its Training Method

KAKUDA Masashi *

Abstract: This paper discusses the Social Studies capability needed by primary school teachers and its training method, based on the trend of teacher education in recent years. Disagreements remain within the field of Social Studies, concerning the essence of the subject. The reply to the question “What is Social Studies?” has not been settled. Therefore, teachers need to give more careful consideration to the aim of social studies lessons than in the case of other subjects, scrutinizing the target, contents, and methods of each lesson or unit. Social Studies lessons that conform to the public curriculum (in Japan) are carried out focusing on people’s efforts, a device and a thought, and a wish. It is necessary to form social recognitions based on people’s actions and psychology. On the other hand, if the objective is to make children understand society scientifically, teachers need to understand that it is necessary to focus on the social system and structure behind people’s acts, and to plan Social Studies lessons from this viewpoint. In teacher education, it is important to ensure that students who wish to become teachers understand that Social Studies lessons are necessary to add a suitable arrangement (gate keeping) to a public curriculum. It also is important to tackle teacher education for Social Studies, with the awareness that a teacher should not be a curriculum user, but a curriculum maker. If possible, it is desirable for teacher education for all subjects to also take the same approach. Especially in the case of those elementary schools in which one teacher teaches all subjects, it is very important.

Keywords: Elementary Schools, Social Studies, Teacher Education, Gate keeping

*Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University